

しらかべ



創立100周年ロゴマーク

2016年3月18日 人権・同和教育部発行

春暖の候、保護者の皆さま方におかれましてはご健勝のことと存じます。今年度、本校の人権・同和教育にご理解とご協力をいただき厚くお礼申し上げます。そして、「しらかべ」をお読みいただいた感想や本校の人権・同和教育の取り組みについてのご意見などについて、懇談などで返信いただき、ありがとうございました。来年度も変わらぬご理解とご協力をよろしくお願いいたします。



東日本大震災から5年

東日本大震災が発生してから、5年が経ちました。いまだに、全国でおよそ174,000人が避難生活を余儀なくされ、復興がなかなか進んでいません。しかし、香川県で生活していると震災の関心が薄れていています。乙武洋匡さんの著書「希望 僕たちが被災地で考えたこと」には、乙武さんが震災直後に、被災地に行き、被災者の前向き・後ろ向きな本音や震災を通して自分の障がいについて改めて思ったこと、被災地に見えた希望の光などが語られています。この本を読んだ生徒の感想の一部を以下に、紹介します。

乙武さんは石巻市立大川小学校を訪れた。この小学校では8割近くの人が津波にのまれた。乙武さんは、残された2割の子どもたちに対して、「生きているのが、つらい。そんな思いで日々を過ごしている子もいるだろうが、生きて、生きて、生きぬいてほしい」と語っている。私は、この文章を読んで、本当に自然と涙がでてきた。まだ、小学生の子どもが友だちも家族も家も失ったのに対して、私は何不自由なく平凡で幸せに生活している。このどうしようもない現実が、ただただ辛かった。もし私が、被災者だったら、こんな言葉をかけられて前向きになれるだろうか。きっと悲しみが大きすぎて、素直に聞き入れられないと思う。しかし、そんな子どもたちに対して今私は、ただ乙武さんとおなじような願いを持ち続けたい。そして、東北から離れたこの場所で、亡くなった人たちの分まで今を精一杯生きることが義務だと思う。毎日学校へ通えること、家に帰ってご飯を食べられること、ささいなことを友だちや家族と話せること。すべて奇跡のようなことだった。このことを少しでも多くの人が気付き、一生懸命に生きるべきだと強く思う。……

この本が出版されたのは、2011年の夏。あの日からメディアでの報道はどんどん減ってしまった。そのため、どのくらい復興したのか分からなくなり、人々の関心が薄くなっていく。目に見えてわかる東北の人たちが忘れられていく現状が悲しくてたまらない。被災していない人には、せめて東北への関心を持ち続け、現状を少しでも知ってほしいと思う。乙武さんは被災地で出会った人々と別れるとき、「必ずまた会いましょう」と口にしたそう。それは、「被災者にとって少しでも未来を感じられる言葉にしたかった」から。私も必ず被災地に行き、自分にできることを見つけたい。それが、直接的に復興につながっていないとしても、地元の人と交流して行事に参加したり、お話を聞いたり日常的でないことをしたいと思う。そんな小さなことが、被災地の方の希望の光になってほしい。

今、目の前にあるたくさんの日常がいかにか有難いことかを改めて考えさせられます。大切なのは、いつも通りの毎日に感謝する気持ちを忘れないこと、そして、被災者の思いに寄り添うこと…。

【2年生3学期の取り組み ～人権クロスロード～】

1月20日、各クラスで人権クロスロードを実施しました。これは一種のカードゲームです。クロスロードとは、「岐路・分かれ道」を意味します。私たちの日常では、ジレンマを伴う決断を迫られる場面が多々あります。そのようなさまざまな状況を想定し、YES・NOの二択で自分の行動を決定し、その理由を示すといったものです。以下に、生徒が取り組んだ問題の例を紹介します。

- ☆あなたは小学校3年生です。クラスにいじめられている子どもがいます。ある日、その子と一緒に帰ろうと誘われますが、いじているグループ10人が自分を見ています。あなたは一緒に 帰る or 帰らない
- ☆あなたは不動産会社の社員です。お客様から「同和地区以外の物件を教えてください」と依頼されました。あなたは同和地区以外の物件を 教える or 教えない

7人程度のグループを作り、生徒の間では活発に意見の交換がされていました。少数意見を否定するのではなく考えることに意識し、級友との話し合いを通じて得るものは多かったようです。以下に生徒が書いた感想（一部抜粋）を紹介したいと思います。

- 一つの議題に対する自分とは反対の意見を聞いて、YESとNOで意見は真逆でも、理由を聞くとその考えにたどり着く経路は似ていることがあるということに気がきました。自分とは違った意見を聞くと、自分では気づかなかったことを発見できるので、人の意見に耳を傾けられるようになりたいです。
- 特に最後のもし私が不動産会社の社員なら、という質問はとても悩みました。私はそういう偏見などを見て見ぬフリをするのはいけないと思ったのですが、仕事だからなあと思って、紹介するを選択しました。実際は、紹介してはいけないという会社の決まりがあるのを聞いて安心したし感心しました。
- 友達が言った「小さいところから、どんなことからでも差別をなくすようにしなければ何も始まらないから」という意見にドキッとしました。確かに今まで同和問題についてや、人権の大切さ、あるべき姿を学んで、自分で「差別はあってはならない。善悪をしっかりと見極めることのできる人間になりたい」と散々言っておきながら、差別をなくすことについて自分が軽く考えていることに気がきました。
- 少数派の人の意見を聞くと納得できるポイントがありました。不動産会社の問題では、私の班ではYES5人、NO2人だったけど、一般的にはNOが正しいので、多数派だからといって正しいわけではないことが分かりました。話し合いというのは、やはり多い方が正しいというわけではなくて、少数派の人の意見も理解することが大切だということが分かりました。

「知識」として学んできた人権を「自分自身の問題」として積極的に考えることができ、また自分とは異なる意見・価値観の存在への気づきもたくさんあったようです。

3年生では、就職・結婚差別の事例から、差別解消に向けての考え方や生き方を見つめます。